

(別添)

## 世界の人びとのための JICA 基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要：	
(1) 事業名	「ネパール連邦民主共和国：ネパール大地震で被災した子ども達への奨学金支援事業」
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
(3) 実施期間	2018年6月1日から2019年1月31日まで
(4) 実施国	ネパール連邦民主共和国
(5) 活動地域	2015年4月のネパール大地震被災地 シンドウパルチョコ、ゴルカ、ドルカ、ラメチャプ、カトマンズ、 ラリトプール、バクタプル、ダルマスタリ、他
(6) 活動概要	<p>①活動の背景：</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ネパールはアジア最貧国の1つで子ども達の教育には多くの課題がある。それに追い打ちをかけるように2015年4月に大地震がネパールを襲い、多くの犠牲者と建物の全半壊で甚大な被害となった。地震から3年以上経った今でも政府の支援が停滞して被災者はトタン板等の仮住宅で暮らすことを余儀なくされている。特に教育への支援は十分でなく震災後の厳しい状況の中、教育の機会を失われた子ども達はつらい生活を強いられている。</li><li>・当団体の主たる事業は『経済的に恵まれない女子の教育支援』で現在ネパール77郡中25郡の子ども達を支援。今回の震災で奨学生が住む多くの村は震源地近くに集中していて壊滅的な被害を受け、被災者の生活復興と共に子ども達が再び学校へ戻れるかが緊急課題となった。ミランクラブは「孤児、母子家庭、極端な貧困層」を対象で被災地の子ども達は非常に厳しい状況にある。</li><li>・当団体は地震直後から義援金募集、被災地支援プロジェクトを立ち上げ継続的に実施。また、「2015年度・2016年度 JICA 基金」で就学困難な被災者に奨学金提供ができ学業継続の課題に取り組んだ。被災した子ども達が基礎教育の課程を修了できるように長期的な支援を目指したい。</li></ul> <p>②活動の目標：</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ミランクラブジャパンの活動理念である「就学困難な女子教育支援事業」の継続。特に、被災した奨学生の支援事業を重点的に取り組む。</li><li>・当団体が最終目標としている12年間の基礎教育の課程を修了できるように被災地奨学生の長期的な支援活動を進める。 ※2018年4月からネパールの教育制度改革で基礎教育課程は10年が12年間となる。</li><li>・ミランクラブの奨学生は孤児・母子家庭など社会的、経済的弱者の女子である。この子ども達に就学の機会を提供することで学業への意欲、自己実現を支援していく。</li></ul>

## 2. 業務実施結果：

### (1) 実施した内容

#### 【実施内容①】奨学生選出のための情報収集：6月～7月

- ・現地カウンターパートのミランクラブネパールと地域スタッフが家庭訪問や学校の先生達からネパール大地震被災地に住む子ども達の情報収集をした。ミランクラブジャパンは現地からの情報により被災地奨学生の現状を確認した。

#### 【実施内容②】対象者の選考、決定：6～7月

- ・ネパール大地震被災地に住む奨学生の家庭環境、経済状況の把握と通学の意思を確認して対象者を選考、「JICA 基金・奨学金」対象者 50 人を決定した。当団体の奨学生は母子家庭の女子が対象であるが、その中でも特に両親を失った孤児、母と本人の二人だけの奨学生など厳しい環境の子ども達がいる。

#### 【実施内容③】『JICA 基金・奨学金』配布

- ・ミランクラブネパールと地方スタッフによる奨学金サポート体制により、奨学生 50 名へ直接に手渡しで奨学金の配布を実施した。奨学金支給 1 人 18,000NPR. ⇒18,345 円

※1 ネパールルピー⇒1.019200 円 (JICA 月次統制レート 2018 年 8 月現在)

8 月 3 日、4 日、5 日、6 日：ドルカ 4 人

8 月 12 日：バクタプル 2 人

8 月 13 日：ゴルカ 10 人

8 月 17 日、18 日：ラメチャップ 4 人

8 月 19 日：ラリトプル(テチョー) 1 人

8 月 20 日：プーティング カトマンズ 3 人

8 月 21 日、22 日、23 日、24 日、25 日：シンドウパルチョコ 12 人

8 月 23 日：タンコット 4 人

8 月 25 日：サンク、スندگانジャリ 5 人

8 月 27 日：ダルマスタリ、カブレスタリ 5 人

#### 【実施内容④】被災地奨学生のフォローアップ：9月～12月

- ・当団体の「ミラン奨学金」の支給と併せて奨学生の情報を収集した。スタッフが各地域の家庭、学校訪問を行った。奨学生の家庭状況、通学・学業状況の把握、次年度の学業継続の希望などの情報を得た。

#### 【実施内容⑤】今後の奨学金支援の検討と奨学金の財源確保プロジェクトの実施

- ・奨学生の家庭状況とともに、今後の学業継続の希望を把握する。
- ・奨学金の財源確保プロジェクトの取組みを推進した。

ネパール：ミランクラブオリジナル製品づくり

日本：ネパールのオリジナル製品を協力団体、国際協力フェスタ等で紹介、販売

## (2) 実施成果：

- ・2015年4月発生の大地震から3年以上経った今、ネパールの首都カトマンズや観光地は徐々に復興されている。しかし、震災復興は地域格差が大きく、当団体の奨学生が住む地方の村々は未だにトタン板等の仮住宅で暮らすことを余儀なくされている。特に教育への支援は十分でなく震災後の厳しい状況の中で奨学生の学業継続が懸念されていた。
- ・選定した50人の奨学生は大地震で家族を失った孤児2人、母と子の二人だけの家族6人、祖父母と姉妹の家族2人、母と兄弟姉妹の家族40人であり、当団体が教育支援対象としている母子家庭の奨学生の中でも非常に困難な経済状況、家庭環境で生活をしている子ども達である。震災により家屋が全壊して住まいの再建ができないために他の家に同居している33家族、借家住まい13家族、震災後に改装された親戚の家に同居が4家族である。特に、シンドウパルチョコ、ラメチャップ、ドルカ等の奨学生は山岳地帯の集落で、家庭の現金収入がなく厳しい経済状況の中で暮らしている。対象者の家庭は自分の土地がなく、母親が他の家の土地で農業に従事したり、他の家の仕事に行ったり、道路工事などの労働者として働くなどの家庭環境であった。このような現状で、震災後に学校へ行く機会を失った子ども達。「学校に行きたい!」という願いを『JICA基金・奨学金』事業は大地震のためにあきらめていた学校復学への夢を叶えていくことができた。

※後掲、メッセージと写真

- ・被災した奨学生は厳しい生活環境の中であるが子ども達に就学の機会を提供することで学業への意欲、自己実現を図ることができた。また、我が子を学校へ行かせたい親の切実な願いは奨学金事業で家庭の負担が軽減され、教育開発が遅れている地方で教育の大切さを認識する機会であった。

※後掲、メッセージ

- ・奨学金の配布をしながら子ども達の通学状況把握と学業継続の励ましをしてきた。また、ミランクラブジャパン理事長も現地を訪問して、奨学生や学校の先生達との面談等でJICA基金事業の進捗状況を把握した。※後掲、ミランクラブネパール発行のニュースレター
- ・JICA基金事業は今回で3回目である。今までに支援を受けた奨学生は自分の進路を目指している。地震の後、特に大学の授業料を支払うのが難しくなっていたが、JICA基金により彼女達の希望の大学レベルを続けているといううれしい声も届いている。※後掲、メッセージ
- ・奨学金の確保は当団体の逼迫する財源の課題である。そこで、奨学生の卒業生や村の女性達の協力を得て、ミランクラブオリジナル製品を縫製してもらい、日本各地の国際協力フェスタやイベント、協力機関で販売している。また、ネパール大地震支援を風化させないために、パネル展、現地活動報告会等を開催して、ネパール大地震の被災地支援を一般市民に呼びかけてきた。ネパール大地震支援は大きな課題の中で地道であるが今後も推進していきたい。

## (3) 得られた教訓など：

当団体は現地に常駐スタッフの配置がないが、カウンターパートのミランクラブネパールとの協働体制で奨学金支援事業を実施した。被災地の村々は首都カトマンズから遠隔地にあるが、地方支部コーディネーターとの連携で被災奨学生の実態を把握、『JICA基金・奨学金』の支給、子ども達のサポートに取り組んだ現地スタッフのご苦労に深く感謝をしたい。

※以下、事業に携わった現地スタッフからのメッセージ

☆私達ミランクラブネパールのメンバーは、過去数年にわたり経済的に恵まれない子ども達への支援をしてくださるミランクラブジャパンと JICA 基金に対し感謝の意を表します。

2015 年 4 月 25 日に起きたネパール大地震は子ども達にも大きな被害を及ぼしました。当時、子ども達は文字通り「孤立無援」の状態でした。食べ物と風雨をしのぐ場所を探さねばならず、結果として多くの子ども達が学校に行くのをあきらめざるを得ませんでした。その時にミランクラブジャパンは JICA 基金から奨学金を得て、困難を抱える子ども達が生きのびるのに重要な役割を果たしました。この基金のおかげで、多くの子ども達があの残酷な瞬間を忘れることができ、彼らの傷ついた心もゆっくりではありますが勉強の方へと向かっていきました。子ども達は本、カバン、制服や勉強に必要なものを手にいれることができたのです。今、子ども達はとても幸せに勉強を続けることができています。

支援の必要な子ども達のほとんどが、過去 3 年間に渡りこの基金からの財政支援を受けました。私はミランクラブメンバーと共に、時折々に子ども達を訪問して教育活動を見守っています。この結果はたいへん満足のいくものです。子ども達はとてもよくやっていて、通常の生活にも戻りました。

最後にミランクラブジャパンに感謝したいです。特に私達の活動に多くを捧げる日本のスタッフ、そして JICA 基金がミランクラブネパールの被災地の子どもたちに対して行ったことは、とても素晴らしいことです。みなさんの愛情が沈んだ子ども達の心に光を灯しました。子ども達は皆さんがしてくださったことを決して忘れないでしょう。ありがとうございます。

[ミランクラブネパールのスタッフ（会計）：Sagar Buddha Manandhar さん]

☆JICA 基金の国際支援についてネパールの地震で被災した女子のために JICA の教育支援のプログラムにより、ネパールのシンドウパルチョク郡、ドルカ郡、ラメチャップ郡に住む学生達を訪問し、支援することをできる機会をいただきました。こうした支援に関われることにミランクラブジャパンおよび JICA に心から感謝いたします。

奨学生が住む村はネパールの僻地で、雨風の季節に奨学生の所まで行くには大変です。全ての場所まで行くのに交通の手段はなく、雨などの時は川を渡るのも難しいです。奨学生の家々まで行くのに 2~3 日かかる場所もあります。しかし、私は JICA の支援を届けるために奨学生が住む所まで行くことができ大変嬉しく思っています。奨学金の配布は子ども達をはじめ、家族の皆も生活に自信を持てるようになりました。私はネパールの農村地域に住み困っている家族の子ども達のため、彼女たちの教育向上のために、今後も皆様と共に協力を続けたいと思います。心から感謝いたします。

[シンドウパルチョク、ラメチャップ、ドルカ地区のコーディネーター：Bhupendra Kumar Pakrin さん]

☆私はミランクラブの奨学金事業が始まった 1990 年に一番最初の奨学生となりました。学校を卒業後はミランクラブネパールのコーディネーターとして活動で、奨学生の情報収集や奨学金を扱っています。特に、2015 年ネパール大地震の被災地を何度も訪問して、子ども達のための JICA 基金に携わってきました。この奨学金のおかげで、地震で被害を受けた子ども達は学校に行き勉強を続けることができました。

大変厳しい状況で暮らす被災地の子ども達への JICA 基金の奨学金事業に関わることができ、私は

とても光栄に思います。ミランクラブの子ども達へ奨学金を準備して下さったことに対し、日本の皆さんに感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

[ミランクラブネパールのコーディネーター：Ramita Maharjan さん]

#### (4) 今後の活動・フォローアップの方針：

- ・「JICA 基金による特別奨学金」は終了しても、当団体の会員による「ミラン奨学金」は従来と同様に支給して被災地の子ども達の学業継続を推進していく。当団体の活動理念である「女子の教育支援事業」を途絶えることなく今後も継続活動をしていく。
- ・シンドウパルチョコ、ラメチャップ、ドルカの地方支部コーディネータや奨学生の卒業生が中心となり、養鶏・ヤギの飼育、女性大工の養成施設を作り、現金収入を得るための経済的確保を計画している。被災地の「支援をうける」立場から自分達で生活再建を目指す「自立」への活動が動き出した。困難な道のりであるが、今後も奨学生の学業継続を見守りサポートをしていきたい。

### 3. その他(エピソード・感想・写真など)

#### (1) 活動中のエピソード・感想など

2018 年度奨学生と家族、2015 年度・2016 年度「JICA 基金」をうけた卒業生から奨学金支援の感謝の声が多く届いているのでいくつかを紹介する。

☆私の名前は Prathara Tamany です。Dolakha の Shree Bishnu Ma. Vi School の 4 年生です。父はもなく、母は他の場所で仕事をしているので叔母と一緒に暮らしています。私は 4 年前からミランクラブの支援をずっと受けています。貧しい中で勉強を続けていくのは難しいですが、ミランクラブの奨学金のおかげで勉強ができます。私が勉強を続けていくのに JICA 基金から 18000 ルピーの奨学金を準備していただきました。奨学金は、本やノートやペンや制服を買うのに使いました。これからも支援していただければ嬉しいです。本当にありがとうございます。

[ドルカ：Prathana Tamang さん]

☆私は Jamuna Tamany で、Jatteshwor i School の 11 年生です。家族は母、兄、姉、弟と私の 5 人です。父はすでに病気のため他界し、母も現在は病気になっています。我が家の経済状況はとてもひどい上に、地震で家も失いました。今は仮設の住まいで暮らしています。私の将来の夢は、いい先生になることです。だから、勉強を続けていきたいです。ミランクラブはどんな時も私を支援してくれました。地震の時には仮設の住まいのシートを準備してくれました。JICA 基金は私が勉強を続けていけるように奨学金を準備してくれました。私のひどい状況を理解し、支援して下さったことに感謝しています。奨学金は学校の授業料、カバン、本やノートなどを買うのに使います。本当にありがとうございます。 [ラメチャップ：Jamuna Tamang さん]

☆私は2016年度に支援をうけた Anchal i Lama です。まず初めに、私が一番たいへんだった時に受けた JICA 基金からの心ある財政支援に対し感謝申し上げます。

地震が起きた時、私は高校を卒業して上級学校進学勉強をしていました。当時、私は大学に進学したいと思っていました。でも家の財政状況と地震の影響でこの希望を叶えることができませんでした。あの自然災害が私の人生を大きく変えてしまったのです。私たち家族は家を失くし、両親の貯めていたお金も生活費に回さなくてはいけなくなりました。そのため、両親から学費の支援を受けることは大変困難でした。でも JICA 基金からの奨学金のおかげで、私は自分で学費を払っていくつかのクラスに出席することができ、上級学校をパスすることができました。最近では中国での1年間のホテル経営のインターシップを終えたところです。

私がさらなる高等教育を求めている大変だったこの時期のことは、今でも忘れることができません。とても大変でしたが、私の人生において挑戦の時期でもありました。私が勉強を続けていくのに受けた JICA 基金の心ある支援のことも決して忘れません。この過去数年でたくさんの新しい経験をしましたし、家族ともシンプルな暮らしができたと思っています。

JICA の奨学金に対し本当に感謝しています。JICA の奨学金は私の人生における教育という側面に、とても大きなインパクトを残しました。私達を支援してくださって、本当にありがとうございました。 [2016年度 奨学金受給の卒業生 : Anchal i Lama さん]

☆私はドルカ地区の Samjhana の祖父です。Samjhana の父親は、彼女が生後6カ月の時に他界しました。我が家はとても貧しく、祖父である私も年老い、彼女の母親も収入がありません。ミランクラブは、孫が1年生の時から奨学金を用意してくれたので彼女は教育を受けることができました。私たちは畑で働いていますがそれ以外に収入源はなく、暮らしていくのは本当にたいへんです。ミランクラブの支援なしには、孫の Samjhana に教育を受けさせることができません。私を含め家族は、ミランクラブにたいへん感謝しています。JICA 基金からも経済的支援を受けました。これらの支援のおかげで私たち家族は救われ、Samjhana の教育費に充てています。もう一度、ミランクラブと JICA にお礼を言いたいです。私達を支援してくださり、本当にありがとうございます。引き続き支援していただければ嬉しいです。 [ドルカ : Samjhana さんの祖父]

☆私はシンドウパルチョクに住んでいる Salina Dulal の母親です。娘がミランクラブと JICA 基金から奨学金を受けました。私は農家ですが、私自身が家族でたった一人の収入源です。食料を手に入れるのも困難な上、さらに娘の教育のために暮らしていくことはとてもたいへんです。私の収入だけでは、娘にいい教育を受けさせることができません。ですから、ミランクラブが娘のために準備してくださった奨学金に私も救われています。娘が勉強を続けていくために奨学金を準備してくださったミランクラブと JICA 基金にたいへん感謝しています。この奨学金は彼女の勉強のために学用品やカバンや制服などを買い、学校の授業料を払います。これからは娘が勉強を続けていくために引き続き支援していただければと思います。本当にありがとうございます。

[シンドウパルチョク : Salina Dulal さんの母]

## (2) 活動の写真



ネパール大地震の被害を受けた奨学生の住まい。  
未だに瓦礫が残っている(2018年8月: ダルマスタリ)



ネパール大地震の被害を受けた奨学生の住まいは  
3年経ってもタン板の仮住まい(2018年12月: プーティング)



学校から帰ると畑を手伝う奨学生  
(ラメチャップ)



ネパール大地震で住まいを失った奨学生と母親  
震災後は叔父さんの家族と住む(シンドウパルチョク)



奨学金を受領にきた奨学生と母親((ドルカ)



奨学金を受領にきた奨学生と母親(バクタプル)



学校訪問のコーディネーターから奨学金を受け取る奨学生(タンコット)



日本とネパールのスタッフの学校訪問で奨学金を受け取る奨学生(ゴルカ)



震災の跡地で奨学生達 (写真左:ラメチャップ、写真右:ドルカ)  
大地震の爪痕はまだ残っているが、学校で学ぶことや友達とのふれあいは楽しいひと時になっている



「JICA 基金」奨学金のお礼のメッセージを書き奨学生達(タンコット)



奨学金で勉強を続けることができた奨学生(ゴルカ)

Vol. 267	गमले	Oct. 2018
----------	------	-----------

JICA 3<sup>rd</sup> Phase's Educational fund distribution in Gorkha on 13<sup>th</sup> Aug 2018



President of Milan Club Nepal/Japan Mr. Madhav Narayan Manandhar, Treasurer Mr. Sagar Buddha Manandhar and coordinator Mrs. Ramita Maharjan went Gorkha on 13<sup>th</sup> Aug 2018 for distribution of JICA educational scholarship.

We departed the Kathmandu at 7:00am and reached Gorkha at 11:30am. We went Bal Mandir Higher Sec. School and Old Capital School and visited the school as well as hand over scholarship to the students. All together 10 students got JICA Scholarship in 3<sup>rd</sup> phase. They are Priyanka Rana, Laxmi Bhandana, Prakriti Aryal, Manisha Gurung, Ganga Shrestha, Bineta Dhakal, Punima Gurung, Saraswati Gurung, Soniya Gurung, Aas Kumari Gurung. But Manisha Gurung and Laxmi Bhandana was absent at day so we hand over scholarship to principal of the School.



Old Capital School is little far from Gorkha Bazar so we dropped the car in Bazar and by walk we went to Old Capital School. In School we met Principal and 3 chairman of the school. In between of them we handover scholarship to students. We took rest and had a tea at that school. After that we left Gorkha at 2:00pm. We reached Kathmandu around 6:00pm.





Photo : Scholarships by the JICA Foundation of the Gorkha branch

Report by: Ramita Maharjan  
Co-ordinator of MCN

「JICA 基金」奨学金情報を掲載のニュースレター (ミランクラブネパールで毎月発行の機関紙)

### (3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

- ・当団体の主たる事業は「経済的に恵まれない女子の教育支援」である。ミランクラブ会員の会費を「奨学金基金」として1990年から途絶えることなく教育支援活動をしてきた。2015年ネパール大地震発生で奨学生の学業継続のために奨学金確保が課題となった。奨学金事業は他の助成金団体では募集対象でない。そこで、JICA 基金が「初中等教育を受けるための貧困層の児童・生徒への奨学金事業」の対象であることを知り活用事業に応募した。幸い2015年度、2016年度に採択され、引き続き、活用上限の3回めの2018年度事業を実施できたことに感謝したい。
- ・事業終了後のフォローアップについて具体的な活動が明確になってきた。ささやかな活動であるが地道に継続をしていきたい。
- ・日本国内では被災地支援金を確保するためにミランクラブの卒業生が製作したオリジナル製品を各地の国際協力フェスタや関係機関で販売。奨学金の財源確保に努めている。
- ・現地では日本からの被災地支援を待つだけでなく、自立のための活動を立ち上げてきた。今後の活動をサポートしながら奨学生のフォローアップを継続していきたい。